Dr.指導 中学野球クラブ

北九州 来月発足 スタッフ全員が医療関係者

体に配慮 投げ過ぎで故障防止

北九州市の医師や理学療法士らが4月、成長期の体づくりに配慮しながら中学生に野球を指導するクラブを発足させる。過度な練習で子どもたちが体を壊さないよう、医療スタッフが練習に付き添い、全面的にバックアップする態勢をとっており、日本少年野球連盟は「運営スタッフ全員が医療関係者というチームは聞いたことがない」としている。（中西瑛）

「北九州メディカル硬式野球クラブ」で、運営スタッフは、医師7人のほか、理学療法士や管理栄養士、看護師ら約30人。市内の病院で医療事務に携わる石飛（いしとび）隆敏さん(45)が監督と代表を務める。

練習には常にスタッフ5、6人が参加する。肩や肘は、使う分だけ故障のリスクが高まり、特に、中学生は、軟骨が弱く、関節の炎症を起こしやすいことから、発達に合わせて、投球数を制限し、その代わりに、体の軸を作る下半身強化やバランス感覚を養うメニューを充実させる。また、けがを防止するためストレッチにも時間をかける。

さらに、部員ごとに体調や技術面での留意点を書き込むファイルを作成し、管理栄養士による食事の指導も行う。

「少年たちのけがのリスクを少しでも減らしたい」と話す石飛さん（中央）ら（3日、北九州市八幡東区で）

石飛さんは、小倉高時代、野球部の強打者として活躍。現在も、勤務先の同僚でつくる社会人野球チームに所属している。大きな故障の経験はないが、少年たちが、過度の練習で肩や肘などを壊した話を見聞きするたび、心が痛み、昨年末、野球を楽しむ医療関係者にクラブの構想を持ちかけた。

2月22日に市内で開いた説明会には、親子8組が参加した。小学6年の長男(12)と訪れた八幡東区の倉重文江さん(43)は、「同級生より体が一回り小さく、けがが心配。この態勢なら思い切りプレーさせられそう」と安心した表情を見せた。現在、10人がクラブ入りを決め、7人が検討中だという。

練習メニューを考えるヘッドコーチの理学療法士、光野武志さん(37)は「体をいたわる考えが、少年の野球界に浸透していない。この試みで子どもたちの練習環境が変われば」と期待。石飛さんも「私の年代まで草野球を楽しめるような体をつくってほしい」と話す。

練習は八幡東区のグラウンドで土、日曜、祝日に行い、今秋までにボーイズリーグの加盟を目指す。問い合わせは石飛さん（070・5816・5154）へ。

救援募金受け付け

けています。募金は郵便振替（
加入者名・読売光と愛の事業団
（http://yomiuri-hikar
カードで。通信欄などに「東日
名を地域版に掲載します。匿名
その旨を明記して下さい。銀行
詳細は事業団ホームページを
読売新聞